

若者の自己肯定感とピアッシングとの関連

Relationship between self-affirmation and piercing during adolescence

佐々木 浩 子^{*1}

SASAKI Hiroko

キーワード：自己肯定感，ピアッシング，若者

I. はじめに

文部科学省の中央教育審議会資料において、日本の若者の自己肯定感が諸外国と比較すると低いことが報告されている¹⁾。この資料では、2013（平成25）年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（内閣府）²⁾を元にして、自分についてのイメージについての質問のうち、「自分自身に満足している」（以下質問1）と「自分は役に立たないと強く感じる」（以下質問2）の2つの質問の回答から、自己肯定感を評価している。その結果、それぞれの質問に、「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合は、質問1では45.8%、質問2では47.1%であったと報告されている²⁾。これら2つの質問に対する回答を諸外国と比較した結果から、日本の子どもたちの自分自身への満足度は低いが、自分自身の有用感は必ずしも低い状況ではないとしている¹⁾。

同じ質問を用いた調査は2018（平成30）年度にも実施され、2019（令和元）年6月に報告されている³⁾。2018（平成30）年度調査では、質問1に45.1%、質問2に51.8%が「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」と回答しており、前述の2013（平成25）年度調査と比較すると、自分自身への満足度は0.7%分下回っているがほぼ同様であり、自分自身の有用感を感じられない者の割合は前回調査を上回った。この結果を諸外国と比較すると、質問1では比較した諸外国全てが7割を超えており、日本の若者の自分自身への満足度は低いといえる。しかし、質問2では同程度の割合の国も多く、自分自身の有用感は必ずしも低い状況ではないという、前回調査と同様の結果であった。

内閣府の調査で用いられている「自分自身に満足している」もしくは「自分には長所があると感じている」という感覚など、自己肯定感を測定するためには複数の尺度が存在する。日本セルフエスティーム普及協会では、自己肯定感を自己価値に関する感覚であり、自分が自分についてどう考え、どう感じているかによって決める感覚であると定義している⁴⁾。

大学生の自己肯定感に関する研究では、男女ともに学校生活の人气が、最も自己肯定感を高

*1 北翔大学教育文化学部教育学科

めることに影響することが明らかとなっている⁵⁾。この研究では、自己肯定感を平石⁶⁾によって作成された「自己肯定意識尺度」を用いている。その結果、男子では父との間で相互理解を図ることが充実感を覚えることにつながり、自己肯定感を高めることに影響を与えていたことを報告している⁵⁾。一方で、女子では、父からの愛情を受け、父や母に対して否定的な感情がないことで、自分に自信を持つことにつながり、その結果自己肯定感を高めることに影響を与えていたことを報告している⁵⁾。

また、大学生の自己肯定感と生活習慣との関連についての研究⁷⁾では、樋口ら⁸⁾による自己肯定感尺度の20項目を用いている。この研究では、好ましい生活習慣を守っている者ほど、自己肯定感が高い傾向であったとされている⁷⁾。例えば、「いただきます」「ごちそうさま」を言うことなどが自己肯定感の高さと関連していることが報告されている。これらの行動は、いわば、規範的な意識の高さと考えることができる。

一方で、少年の自傷行為に関する研究では、自傷行為の機能（自傷行為の際に感じていたことなど）に関する探索的因子分析の結果から、感情調整、顕示、自他の境界／解離への抵抗、承認希求、自罰の5因子が抽出されたことが報告されている⁸⁾。自傷行為には、一般的にリストカットなどの問題行動があげられるが、耳たぶなどに穴をあけること、いわゆるピアッシング行為も一種の自傷行為として捉えられている面がある。金は⁹⁾、自傷行為とピアッシング行為との関連についての調査研究を行い、ピアッシング行為をどの程度自傷だと感じるかについて、過剰なピアッシング行為を行っている者と平均的なピアッシング行為を行っている者との有意な差は認められなかったことを報告している。しかし、自傷行為への共感性において、過剰なピアッシング行為をしている者は自傷行為への共感性が高い結果であったことを報告しており、過剰なピアッシング行為は自傷の意味を持つ可能性があることを示唆している。

ピアッシング行為に関しては、大久保ら¹⁰⁾も、青年期の身体装飾の点から調査を行っており、ピアッシングを行った動機として、ストレスからの回避、手軽な自己変容、ファッション性の追求の3つの因子が抽出されたことを報告している。また、この研究において、ストレスからの回避性の高い者ほど、自分で安全ピンを使ってピアス穴をあけていることも報告している。ピアッシング行為は自傷行為としての側面を持ちながら、一方ではファッション性の追求として、特に若者の間ではおしゃれとしての身体装飾や自己表現としての一手段など、肯定的に捉えられている可能性が高い。

そこで、本研究では、若者におけるピアッシング行為の実態と、ピアッシング行為経験の有無と自己肯定感との関連を明らかにするために、自己肯定感とピアッシングに関する調査研究を行った。

II. 方法

調査は、インターネット調査会社の登録者を対象として、インターネット調査を実施した。調査時期は、2018年1月で、18～25歳の男女各50名の合計100名から回答を得た。対象者の平

表1 対象者の居住地

居住地	全体	男性	女性	<i>p-value</i>
	(n=100)	(n=50)	(n=50)	
	人数(人)(割合(%))	人数(人)(割合(%))	人数(人)(割合(%))	
居住地				.227
北海道・東北	4 (4.0)	3 (6.0)	1 (2.0)	
南関東、北関東、甲信	47 (47.0)	25 (50.0)	22 (44.0)	
北陸、東海	15 (15.0)	8 (16.0)	7 (14.0)	
近畿	21 (21.0)	6 (12.0)	15 (30.0)	
中国、四国	8 (8.0)	4 (8.0)	4 (8.0)	
九州、沖縄	5 (5.0)	4 (8.0)	1 (2.0)	
合計	100 (100.0)	50 (100.0)	50 (100.0)	

均年齢は22.9 (±1.9, 標準偏差) 歳であった。対象者の居住地は、北海道・東北地区から、九州・沖縄地区まで日本全国に分布していた (表1)。

調査項目は、基本属性、自己肯定感、ピアッシング行為に関する質問から構成されている。

基本属性に関する質問としては、性、年齢、職業、喫煙習慣及び飲酒習慣であった。職業は、学生を含めて、会社員・公務員、派遣・契約社員、専門家 (医師・弁護士・会計士など)、自営業、自由業及びその他など、全部で12種類の選択肢があり、本研究では、学生とそれ以外の2群に分けて集計した。喫煙習慣については、だいたい毎日喫煙とときどき喫煙を喫煙している者とし、この他に以前喫煙していた者と以前から喫煙していない者の3群に分けて集計した。飲酒習慣については、毎日飲酒から週3～4回の飲酒までの者を高頻度の飲酒習慣者とし、週に1～2回の飲酒及び月に2～3回の飲酒の者を中頻度の飲酒習慣者、月に1回以下の飲酒の者を低頻度の飲酒習慣者、全く飲まない者を飲酒習慣なしの者として、4群に分けて集計した。

自己肯定感は、平石⁶⁾による自己肯定意識尺度を用いて測定した。自己肯定意識尺度は、対自己領域と対他者領域に大きく二分され、それぞれが3つの下位成分から成立している。対自己領域の下位成分は、自己受容、自己実現的態度、充実感であり、自己受容の質問として4項目、自己実現的態度の質問として7項目、充実感の質問として8項目、計19項目である。対他者領域の下位成分は、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張であり、自己閉鎖性・人間不信の質問として8項目、自己表明・対人的積極性の質問として7項目、被評価意識・対人緊張の質問として7項目、計22項目で、全ての質問項目数は41項目である。

自己肯定意識尺度への回答は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまらない」の5件法である。得点は、それぞれ順に5点から1点が配点される。ただし、41項目中4項目は、逆転項目として、配点が逆になる。よって、すべての質問項目の合計最低点は41点、合計最高点は205点となり、得点が高いほど自己肯定意識が高いことを示す。得点の集計は、対自己領域の下位成分3成分と、対

他者領域の下位成分3成分の、合計6成分と合計点を集計した。

ピアッシング行為に関する質問項目は、1. ピアス穴をあけているか、2. ピアス穴の数、3. ピアス穴の部位（複数回答）、4. ピアス穴をあけた方法（複数回答）、5. ピアス穴をあけた理由（複数回答）、6. ピアス穴をあけていない者へピアッシングしていない理由（複数回答）7. 他人のピアッシング部位の許容範囲（複数回答）の7質問項目である。

質問項目1のピアス穴をあけているかの質問には、「はい」「いいえ」「以前あけていた」の3件法で回答を求めた。このうち、「はい」と「以前あけていた」と回答した者に対して、質問項目2から5及び7への回答を求め、「いいえ」と回答した者には質問項目6と7への回答を求めた。

質問項目2のピアス穴の数については、1つから7つ以上の選択肢を設定し、集計は1～2つ、3～4つ、5つ以上の3群に分けて集計した。

質問項目3のピアス穴の部位（複数回答）については、「耳たぶ」「耳の軟骨」「鼻」「眉」「唇」「舌」「へそ」「その他」の選択肢を設定した。

質問項目4のピアス穴をあけた方法（複数回答）については、「自分で安全ピンで」「自分でピアッサーで」「他人に安全ピンで」「他人にピアッサーで」「ピアススタジオ（ピアス店）で」「病院で」「その他」の選択肢を設定した。

質問項目5のピアス穴をあけた理由（複数回答）については、「好奇心で」「おしゃれ感覚で」「嫌なことがあったから」「自分を変えたかったから」「友人に誘われたから」「周囲があけていたから」「反抗心で」「イヤリングよりピアスの方が種類が多かったから」「衝動的に」「その他」の選択肢を設定した。

質問項目6のピアス穴をあけていない理由（複数回答）については、「魅力を感じないから」「痛そうだから」「恐怖心があるから」「不快に感じるから」「周囲が反対したから」「禁止されていたから（学校、アルバイト先等）」「金属アレルギーだから」「手入れが面倒くさそうだから」「イヤリングで代用できるから」「その他」の選択肢を設定した。

質問項目7の他人のピアッシングで受け入れられない（不快に感じる）部位はどこか（複数回答）については、「耳たぶ」「耳の軟骨」「鼻」「眉」「唇」「舌」「へそ」「その他」「全て受け入れられる（不快に思う部位はない）」の選択肢を設定した。

結果の解析は、男女及び、ピアッシング行為経験の有無別による群ごとの比較検討を行った。統計学的検討には、平均値の差の検討にはt検定を、比率の差の検討には χ^2 検定もしくはFisherの直接確率検定を用いた。

Ⅲ. 結果

表2には、対象者の基本属性と男女比較の結果を示した（表2）。

表2 対象者の基本属性と男女比較の結果

	全体 (n=100)	男性 (n=50)	女性 (n=50)	p-value
年齢 (平均値±標準偏差)	22.9 ±1.9	22.9 ±1.9	22.5 ±1.9	.316
職業 (人数, 割合(%))				.532
学生	36 (36.0)	20 (40.0)	16 (32.0)	
学生以外	64 (64.0)	30 (60.0)	34 (68.0)	
喫煙習慣 (人数, 割合(%))				.018
毎日・ときどき	19 (19.0)	15 (30.0)	4 (8.0)	
以前に喫煙	6 (6.0)	3 (6.0)	3 (6.0)	
喫煙習慣なし	75 (75.0)	32 (64.0)	43 (86.0)	
飲酒習慣 (人数, 割合(%))				.010
毎日・週3回以上	20 (20.0)	16 (32.0)	4 (8.0)	
週1~2回・月2~3回	29 (29.0)	14 (28.0)	15 (30.0)	
月1回以下	22 (22.0)	11 (22.0)	11 (22.0)	
飲酒習慣なし	29 (29.0)	9 (18.0)	20 (40.0)	

年齢及び学生の割合において、有意な男女差は認められなかった。喫煙習慣及び飲酒習慣では、男女差が認められ、男性に比較して女性において、喫煙習慣なしおよび飲酒習慣なしと回答する者の割合が有意に高かった。

表3には、ピアス用穴の有無及び不快と感じる部位に関する男女比較の結果を示した(表3)。

表3 ピアス用穴の有無及び不快と感じる部位に関する男女比較結果

	全体 (n=100)	男性 (n=50)	女性 (n=50)	p-value
	人数(人)(割合(%))	人数(人)(割合(%))	人数(人)(割合(%))	
ピアス用の穴の有無				.004
あけている	21 (21.0)	4 (8.0)	17 (34.0)	
あけていない	76 (76.0)	45 (90.0)	31 (62.0)	
以前あけていた	3 (3.0)	1 (2.0)	2 (4.0)	
ピアッシング不快部位 (複数回答)				
耳たぶ	30 (30.0)	15 (30.0)	15 (30.0)	.100
耳の軟骨	22 (22.0)	15 (30.0)	7 (14.0)	.090
鼻	46 (46.0)	24 (48.0)	22 (44.0)	.841
眉	39 (39.0)	19 (38.0)	20 (40.0)	.100
唇	45 (45.0)	22 (44.0)	23 (46.0)	.100
舌	49 (49.0)	24 (48.0)	25 (50.0)	.100
へそ	26 (26.0)	16 (32.0)	10 (20.0)	.254
その他の部位	1 (1.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	-
全て受け入れられる	18 (18.0)	10 (20.0)	8 (16.0)	.795

ピアス穴の有無では、男女差が認められ、男性に比較して女性において、あけていると回答した者の割合が有意に高かった。ピアス穴をあけている部位についての不快感については、全

体で舌と回答した者の割合が最も高く、次に鼻、唇であったが、有意な男女差は認められなかった。

表4には、ピアス用穴をあけている者と以前にあけていた者（ピアッシング行為経験者）に対して、穴の数、穴の部位、穴をあけた方法、穴をあけた理由について回答させた結果を示した（表4）。

表4 ピアッシング行為経験者における穴の数、部位、あけた方法及びあけた理由

	全体	男性	女性
	(n=24)	(n=5)	(n=19)
	人数(人)	人数(人)	人数(人)
ピアス穴の数			
1~2つ	17	4	13
3~4つ	4	0	4
5つ以上	3	1	2
ピアス穴の部位（複数回答）			
耳たぶ	24	5	19
耳の軟骨	5	1	4
鼻	1	1	0
眉	1	1	0
唇	2	1	1
舌	0	0	0
へそ	1	1	0
その他	0	0	0
ピアス穴をあけた方法（複数回答）			
自分で、安全ピン使用	4	3	1
自分で、ピアッサー使用	6	3	3
他人に、安全ピン使用	1	0	1
他人に、ピアッサー使用	8	0	8
ピアスタジオ（ピアス店）で	3	1	2
病院で	9	0	9
その他	0	0	0
ピアス穴をあけた理由（複数回答）			
好奇心で	10	3	7
おしゃれ感覚で	18	3	15
嫌なことがあったから	1	1	0
自分を変えたかったから	2	0	2
友人に誘われたから	0	0	0
周囲があけていたから	1	0	1
反抗心で	1	0	1
イヤリングよりピアスの方が種類が多かったから	4	1	3
衝動的に	0	0	0
その他	3	0	3

全体としての人数が少ないため、男女間での統計学的検討は行っていない。全体では、穴の数は1～2つと回答した者が最も多かった。穴の部位では、耳たぶが最も多かった。穴をあけた方法では、他人にピアッサーを使ってもらってあけた者が最も多かった。穴をあけた理由では、おしゃれ感覚でと回答した者が最も多く、次に好奇心で、であった。

表5には、ピアス用穴をあけていない者（ピアッシング行為未経験者）に対して、穴をあけていない理由について回答させた結果を示した（表5）。

表5 ピアッシング行為未経験者におけるあけていない理由

	全体	男性	女性
	(n=76)	(n=45)	(n=31)
	人数(人)	人数(人)	人数(人)
ピアス穴をあけていない理由（複数回答）			
魅力を感じないから	42	31	11
痛そうだから	50	24	26
恐怖心があるから	28	11	17
不快に感じるから	9	7	2
周囲が反対したから	3	1	2
禁止されていたから	2	1	1
金属アレルギーだから	1	0	1
手入れが面倒くさそうだから	17	6	11
イヤリングで代用できるから	4	0	4
その他	0	0	0

ピアス穴をあけていない理由では、全体では痛そうだからが最も多く、男性では魅力を感じないからで、女性では痛そうだからが最も多い結果であった。

表6には、自己肯定意識尺度の6つの下位成分の平均値と男女比較の結果を示した（表6）。下位成分において有意な男女の差は認められなかった。

表6 自己肯定意識尺度の得点の男女比較

	全体	男性	女性	<i>p-value</i>
	(n=100)	(n=50)	(n=50)	
	平均値 (±標準偏差)	平均値 (±標準偏差)	平均値 (±標準偏差)	
対自己領域				
自己受容	9.6 (±3.1)	9.1 (±3.0)	10.0 (±3.2)	.155
自己実現的態度	20.8 (±6.0)	19.6 (±5.9)	21.9 (±6.0)	.056
充実感	24.0 (±6.4)	23.3 (±6.3)	24.7 (±6.6)	.278
対他者領域				
自己閉鎖性・人間不信	23.8 (±7.1)	23.5 (±7.7)	24.1 (±6.5)	.655
自己表明・対人的積極性	21.3 (±5.9)	20.4 (±6.5)	22.2 (±5.2)	.129
被評価意識・対人緊張	18.5 (±6.0)	19.0 (±6.4)	18.0 (±5.6)	.407
合計得点	117.9 (±15.7)	114.9 (±18.3)	120.9 (±12.0)	.055

表7には、自己肯定意識尺度の6つの下位成分の平均値とピアッシング行為経験者と未経験者との比較の結果を示した(表7)。ピアッシング行為経験の有無により、自己肯定意識尺度の得点には有意な差は認められなかった。

表7 ピアッシング行為経験者と未経験者との自己肯定意識尺度の比較

	全体	経験者	未経験者	<i>p-value</i>
	(n=100)	(n=24)	(n=76)	
	平均値 (±標準偏差)	平均値 (±標準偏差)	平均値 (±標準偏差)	
対自己領域				
自己受容	9.6 (±3.1)	8.7 (±3.1)	9.9 (±3.1)	.108
自己実現的態度	20.8 (±6.0)	19.9 (±5.1)	21.0 (±6.2)	.457
充実感	24.0 (±6.4)	23.3 (±6.6)	24.2 (±6.5)	.588
対他者領域				
自己閉鎖性・人間不信	23.8 (±7.1)	22.2 (±7.9)	24.1 (±6.9)	.306
自己表明・対人的積極性	21.3 (±5.9)	21 (±5.4)	21.4 (±6.2)	.759
被評価意識・対人緊張	18.5 (±6.0)	17.5 (±6.1)	18.7 (±6.1)	.440
合計得点	117.9 (±15.7)	112.6 (±16.7)	119.3 (±15.3)	.088

IV. 考察

本研究において、ピアッシング行為の経験者は全体の24.0%であった。金⁹⁾の調査では、ピアッシング行為の経験者は、285名中の166名、58.2%であったことが報告されている。また、大久保ら¹⁰⁾の調査では、719名中203名、28.2%であったことが報告されている。岡林ら¹¹⁾は、女子大学生を対象に、他者の身体装飾への意識についてタトゥーとピアスを中心に調査研究を行っている。その結果において、耳たぶのピアスの採用経験者は、59.0%であったことを報告している。本研究対象者の結果は、金⁹⁾及び岡林ら¹¹⁾の結果とは大きく異なり、大久保ら¹⁰⁾の研究結果とはほぼ同程度であることが明らかとなった。ピアッシング行為の経験者の割合に大きな差が生じている要因には、それぞれの調査対象者の男女の割合が考えられた。岡林ら¹¹⁾は、女子大学生を対象として調査を行っており、金⁹⁾の研究は、男女含まれているが対象者のほとんどが短期大学学生で、男性は285名中28名、9.8%であった。本研究結果においても、男性の90.0%はあけていないと回答しており、ピアッシング行為の経験の有無には性差があることが明らかとなった。

ピアッシング行為の経験の有無には性差が認められたが、ピアッシングの部位では男女ともに耳たぶと回答した者が最も多い結果であり、ピアッシング部位での性差は認められなかった。大久保ら¹⁰⁾の調査においても、ピアッシングの部位では、耳たぶが98.6%と最も多く、次いで耳の軟骨が15.9%、鼻が2.9%であった。本研究では、ピアッシング行為経験者が全体で24名、24%と人数が少なく、他研究結果との単純な比較は難しいが、耳たぶ、耳の軟骨と回答した者の割合が高く、ピアッシング行為に耳の周りを選択する者が多いことは、他研究結果と同様であった。また、他者のピアッシングに対する許容可能部位についての結果では、不快であると

感じる者の割合が低い部位は、耳の軟骨、へそ、耳たぶの順であった。逆に不快であると感じる者の割合が高い部位は、舌、鼻、唇の順であった。大久保ら¹⁰⁾の調査では、許容できる部位として、耳たぶ、耳の軟骨、鼻の順に許容の割合が高かったことが報告されている。これらから、ピアッシング行為としては耳周りを選択することが多く、耳周りへのピアッシング行為は他の部位に比べて受け入れられやすいことが考えられた。

大久保ら¹⁰⁾の研究では、耳周りの他に、へその部位も許容の割合が高かった。本研究結果においても、へそは、不快であると感じる者の割合が低く、へそへのピアッシング行為は他の部位に比べて受け入れられやすいことが考えられた。へそへのピアッシング行為については、服装によって隠れてしまうことも多く、常に視界に入る顔周辺とは受け入れの感情が異なる可能性が考えられた。

しかし、舌、唇、鼻といった顔の中心や口の周りへのピアッシング行為については、大久保ら¹⁰⁾の調査においても許容できる者の割合が低く、本研究結果もピアッシング行為の有無とは関係なく、許容できる者の割合が低かった。本研究では、ピアッシング行為を経験していない者へピアス穴をあけていない理由を尋ねたところ、痛そうだからが全体として最も多かった。金⁹⁾の研究においても、ピアッシング行為をしていない理由として、最も多いのが「痛そう」で、その次に「興味がない」「怖い」であった。この研究⁹⁾では、自由記述の内容も報告しており、「親からもらった身体を傷つけない」「勢いが無い」「悪いイメージがあるから」「周りの反応が気になるから」などの理由があった。これらから、ピアッシング行為の経験の有無は、痛みへの恐怖と、周りからどのように見られるかという意識とに関連すると考えられ、ピアッシング行為への否定的なイメージの強さがピアッシング行為の抑制につながっている可能性が示唆された。

大久保ら¹²⁾は、ピアッシング行為の個人内での意味づけについてインタビュー調査による質的検討を行っている。研究では、自身の耳たぶへのピアッシング行為を一般的なピアッシング行為として捉えている者と、自身の口へのピアッシング行為を一般的には受け入れがたいことであると捉えている者とのインタビュー調査を行っている。その結果、両者ともピアッシング行為はファッションの一部として捉えているが、社会的には否定的なイメージを持たれることがあることを理解していることが報告されている。本研究においても、ピアッシング行為を経験した理由では、男女ともにおしゃれ感覚及び好奇心が多い結果であった。松岡¹³⁾は、高校生を対象にヘアカラーやピアスの意識構造についての調査研究を実施している。その結果、ピアスに対するイメージについての因子分析では、第1因子として「気分を変えることができる」「イメージチェンジできる」「オシャレである」などの「変身性因子」を、第2因子として「他者と差をつけることができる」「自信をもつことができる」などの「顕示性因子」の2因子が抽出されたことを報告している。これらから、若者は、ピアッシング行為に対する社会での否定的なイメージを理解しながら、ピアッシング行為でおしゃれを楽しみ、自分自身の自信を高めることにつながっている可能性があることが考えられた。

本研究結果では、自己肯定感の6つの下位成分のうち、自己実現的態度で男性に比較して女

性の得点が高く、有意な傾向が認められたが、他の成分では有意な男女差は認められなかった。また、ピアッシング行為の経験の有無による自己肯定意識尺度の平均値の比較において、6つの下位成分全てで有意な差は認められなかった。日本セルフエスティーム普及協会では、自己肯定感を自己価値に関する感覚であり、自分が自分についてどう考え、どう感じているかによって決まる感覚であるとしている²⁾。さらに続けて、「自分の存在そのものを認める」感覚であり、「ありのままの自分をかけがえのない存在として肯定的、好意的に受け止めることができる感覚」のことで、「自分が自分をどう思うか」という自己認識が自己肯定感を決定づけていると記述されている²⁾。自己肯定感に関し、高垣¹⁴⁾は、その著書において、子どもたちが現在の社会の中で自分が自分であることに否定的なメッセージを受け続けており、そのために「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感をもてないでいると記述している。また、自己肯定感のない人は、自分が「何をしたいかよりも、他人からどう評価されるか」ということがとても気になって、自分の考えや気持ちに従って、自分の行動や人生を選ぶことが困難になる、とも述べている。さらに、「自己愛」についても述べており、「自己愛」は自分を価値ある存在と思いたがる心であるとも述べている。そのような「自己愛」は自己肯定感ではなく、むしろ自分が自分であって大丈夫という自己肯定感がないための空虚さを補うために賞賛を求めている心であると述べている¹⁴⁾。これらより、若者において、ピアッシング行為は他者から見られる自分自身を意識したおしゃれの一部であり、自分に自信をもつための手段であることが考えられ、自傷行為としてのピアッシング行為とは言い切れないことが考えられた。しかし、若者におけるピアッシング行為は、自分への自信につながっている可能性があるものの、自分をよりよく魅せたいという他者から見られる自分を意識した行為という側面が大きく、必ずしも自己肯定感を高めることにつながっていない可能性が考えられた。

本研究は、全国的な傾向を把握するためにインターネット調査を採用していることに加え、対象者も100名と限定されている点において研究の限界がある。また、調査対象者のうちピアッシング行為を経験している者が少ない点でも限界があると考えられる。さらに、横断研究である点において、自己肯定感とピアッシング行為との関連についても、結果と要因の分析には至っていない点でも限界があるといえる。今後は、ピアッシングという身体装飾の一つの行為がどのような意識の変化を経て自己肯定感へ影響を与えていくのか、縦断的な研究によって明らかにしていく必要があると考えられた。

V. 要約

若者における一種の自傷行為として捉えられているピアッシング行為の実態と、ピアッシング行為の経験の有無と自己肯定感との関連を明らかにするために、自己肯定感とピアッシングに関する調査研究を行った。その結果、ピアッシング行為の経験者は全体の24.0%であった。ピアッシングの部位では耳たぶにあげている者が最も多く、あげた方法では他人にピアッサーを使用してもらう方法が最も多かった。他人のピアッシング行為に対しては、耳周り及びへそ

が肯定的な受け止めであったのに対して、唇、舌及び鼻など顔の中心に近い部位は否定的な受け止めをする者が多かった。ピアッシングの理由では、おしゃれ感覚でと回答した者が最も多く、自己肯定感とピアッシング行為とは関連が認められなかった。これらから、ピアッシング行為は自傷行為としてよりも、他者から見られる自分を意識した側面が大きいことが予測された。また、他者から見られる自分への意識は、自分が自分をどう思うかという自己肯定感を高めることにつながっていないことも予測された。今後は、ピアッシングという身体装飾の一つの行為がどのような意識の変化を経て自己肯定感へ影響を与えていくのか、縦断的な研究によって明らかにしていく必要があると考えられた。

参考文献

- 1) 文部科学省：中央教育審議会（第112回）配布資料，資料3－2 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓（ひら）く子供を育む教育の実現に向けた，学校，家庭，地域の教育力の向上（教育再生実行会議第十次提言本文・参考資料（2/2） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/1387211.htm（20231120）
- 2) 内閣府：平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成26年6月），第2部調査の結果，第1章人生観関係 https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12927443/www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_1.pdf（20231120）
- 3) 内閣府：平成30年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（令和元年6月），第2部調査の結果，第1章人生観関係 <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12927443/www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf/s2-1.pdf>（20231120）
- 4) 日本セルフエスティーム普及協会：自己肯定感とは，<https://self-esteem.or.jp/selfesteem/>（20231120）
- 5) 河越麻佑，岡田みゆき：大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因，日本家政学会誌，vol.6，No.5，222-233（2015）
- 6) 平石賢二：青年期における自己意識の発達に関する研究（I）－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討－，名古屋大學教育學部紀要，教育心理学科，37，217－234（1990）
- 7) 樋口義之，松浦賢長：大学生における自己肯定感と生活習慣との関連に関する研究，福岡県立大学看護学部紀要，1，65－70（2003）
- 8) 樋口義之，松永賢長：自己肯定感の構成概念および自己肯定感尺度の作成に関する研究，母性衛生，43，4，500－504（2002）
- 9) 金愛慶：日本の若者におけるピアッシング行為に関する一考察－自傷行為との関連性を中心に－，白梅学園大学・短期大学紀要，42，13－28（2006）
- 10) 大久保智生，鈴木公啓，井筒芽衣：青年期におけるピアッシング行為への許容と動機－身体装飾としてのピアスに関する研究（1）－，線維製品消費科学，52，2，113－120（2011）

- 11) 岡林誠士, 工藤雅人, 熊谷伸子: 女子大学生における他者への身体装飾への意識～タトゥーとピアスを中心として～, 繊維製品消費科学, 59, 7, 542-550 (2018)
- 12) 大久保智生, 井筒芽衣, 鈴木公啓: PAC分析を用いた青年のピアッシングへの意味づけの質的検討—身体装飾としてのピアスに関する研究(2)—, 繊維製品消費科学, 52, 2, 121-128 (2011)
- 13) 松岡依里子: ヘアカラー, ピアスにみる身体装飾意識の構造—帰国生徒校と一般校の比較から—, 日本家政学会, 62, 2, 101-108 (2011)
- 14) 高垣忠一郎: 生きることと自己肯定感, 第12刷, 第1部子どもの問題と自己肯定感—魂<いのち>の故郷」をもっていますか?—, 4子どもの「心の問題」と自己肯定感, 5自己肯定感を感じさせない社会の病理, pp.61-95, 新日本出版社, 東京 (2015)

Relationship between self-affirmation and piercing during adolescence

Abstract

The purpose of this study was examined to clarify the relationship between self-affirmation and piercing during adolescence. The subjects were male and female of 100 people, and they were asked to this research through an internet research company in 2018. The survey composed personal data, lifestyle, piercing and self-affirmation. The questions about piercing were numbers of piercing hole, body parts of piercing, how to drill of hole, reasons for piercing, reason for not piercing and uncomfortable body parts for piercing.

The results showed that 24.0% of the participants had experienced the piercing. The most common piercing site was the earlobe, and the most common method of piercing was having someone else use a piercer. The piercings of around the ear and navel were the high frequently positive thoughts, while the lips, tongue, nose, and other areas near the center of the face were negative thoughts for piercing. The most common reason for piercing was fashion, and there was no relationship between self-affirmation and the piercing use.

From these results, it was predicted that the piercing was more self-consciousness about themselves from others than as a self-mutilation. It was also predicted that the self-consciousness of oneself as seen from others did not lead to increasing the self-affirmation of how one feels about oneself.

In the future, it was considered necessary to clarify how changes in consciousness caused by such as a piercing influence self-affirmation through longitudinal studies.

Keywords: self-affirmation, piercing, adolescence